

## 2025年度 キャリアデザイン学部

自己推薦・グローバル体験入学試験

## 小論文 問題

氏名 ( )

受験番号 ( )

以下の文章を読み、以下の問いに答えなさい。

四国の讃岐出身の空海は、十八歳のときに京に出て大学に入った。大学というのは、貴族階級の子弟の教育機関で古代のエリート教育機関である。

しかし空海は、せっかく大学に入ったのに、ほどなくしてドロップアウトしてしまう。乞食同然の私度僧(自分勝手に頭を丸めて坊主になること)、四国の山奥に入り、山岳修行者となる。

これ以後、三十一歳の年に遣唐使船に乗り込むまで、空海がどこで何をしていたかは明らかではない。「謎の空白時代」といわれる。山野をめぐり、寺院をめぐり、修行に修行をつづけたと推定されるだけである。それがいかなる修行であったか明らかではない。

遣唐使船に乗り込んだ空海は一介の無名の留学僧にすぎなかった。彼に注目するものは誰もいなかった。

しかし、唐の地に入るや、空海はたちまち頭角をあらわす。十年余に彼の修行時代の蓄積が一挙に吐き出されて、唐人から最高の知識人として遇されるにいたるのである。密教の権威、恵果阿闍梨をして、門弟の中国人僧すべてをさしおいて、外国人たる空海に、密教の全てを伝授しようと決意させるほど、空海に対する評価は高かった。

「謎の空白時代」に、彼がどこで何を修行していたのかは明らかでない。しかし、その修行がもたらしたものは、歴史にはっきり刻印されている。唐に滞在したわずか1年余の間に、名もなき留学僧から、密教の全てを伝えられた当代随一の高僧となる。それは留学の成果というよりは「謎の空白時代」の修行の成果が、留学を契機に花開いたというべきであろう。「謎の空白時代」は空海

の青春である。

そのころ、遣唐使船に乗り込むことは半分命を失うことを意味した。造船術も航海術も未熟なこの時代、東志那海を横断するという大航海は技術的に難しく、遭難が続発して、無事に往復できた人はほんの数えるほどしかいなかった。それは文字通り、命懸けの航海だった。空海はむしろその航海が危険なものであることを承知していた。

それでも空海は(1)船出した。「謎の空白時代」は、彼に自分に対する自信を与えていた。自分に対する自信があったから、空海は自分に賭けた。自分の人生を自分に賭けたのである。

自分の人生を自分以外の何者かにかけてしまう人がどれほど多いことか。自分以外の誰か頼りになる人、頼りになれる組織、あるいは、自分自身で切り開いていくのではない状況の展開などなど。他者に側に自分の人生を賭ける人が世の大半である。

(出典:立花隆『青春漂流』講談社、1988年)  
※上記出典を一部改訂した。

問1 下線部(1)「船出」とは何を意味していますか。本文を踏まえて100字程度でまとめなさい(本文でいう「謎の空白時代」という用語をその意味を含めて用いること)。

問2 あなたがキャリアデザイン学部に入學したらどのような「謎の空白時代」を過ごしたいですか。あなたのこれまでの体験も交えつつ400字程度で述べて下さい。